

1

WHO主催老年問題に関する京都国際シンポジウム(1978年)

エイジング研究——その課題と目標

■新たな世界観の創造を

私は人間の普遍的特性に深い関心を持っており、このことを考えるうえでは一種の哲学的な文化人類学が必要だと思っている。

我々がこうして日本に集まったのは、それぞれの社会間での共通の問題、今回は人口の高齢化に対する対応の仕方が、国々によって非常に多様性に富んでいるという点に、興味を持っているからだと言えるだろう。

しかし、我々は個々の相違を研究するだけにとどまらず、我々の根源的な存在を理解し、それによって、人生に新たな意味を与え、成長、健康、そして教育のための様々な機会を提示してくれるような諸条件を、新たに創り上げるよう努力しなければならない。

また年をとってからも、我々の社会、家族、さらには我々自身に対しての共存関係を維持しつつ、生きていく方法を学ばねばならない。そして、最終的には死に直面することになる。

すなわち、現実逃避的な考えを持たずに、また誤った信条、倫理観、あるいは誤った宗教観を持たずに死に臨む方法を学ばねばならない。

我々の本質とは何か、そしていかに生きるべきかということについて、より深い理解へと導いてくれるような世界観を語る際には、「宗教」を見過ごすわけにはいかない。一言でいえば、すべての宗教は死、孤独感、悪、そして未知の世界などに対する我々の恐れへの解決法—あるいは、少なくともそれらの解明を扱うものである。

宗教は必然的にダイナミックなものであり、変化しつつある世界の要請に応じて変化し、成長していくものである。しかし、エイジングと死についての優れた人生哲学も、公共政策を発展させるのにはいささか不十分であることは認めざるを得ない。

エイジングプロセスの神秘を解明し、適切な対応策を決める助けとなるかもしれないもう一つのアプローチは「科学」である。

西洋的な意味において、科学は自然を予測し、時としてこれを管理・規制しようとするものである。しかし、自然の規則性のみに着眼するのでは不十分だし、しかも多くの点において愚かなことであり、明らかに楽観的すぎると思う。

個々の学問分野はあまりにも深く掘り下げられ、またあまりにも視野が狭くなりすぎている。科学も技術も、



Robert N. B

playback

発言

ヒューマニズムはもちろんだが、新鮮で新しい種類の神学・哲学に則って導かれねばならない。

自然界は、尊重すべきものであるが、反科学的・反技術的になる必要はない。ただ、もっと幅広い視野から、科学・技術を見る必要があるのだろうと思う。

■研究者の責務と目標

多くの点において、エイジングの研究は、とすれば視野が狭くなりがちな西洋の意味での科学研究とは違って、比較的幅広い視野に立っているといえる。これは、一般に高齢層の病気は急を要すると捉えられないからかもしれないし、また、我々は普通、エイジングを単一プロセスというよりは、多くの要因を含む複合プロセスだと見なしているからかもしれない。

いずれにしても、エイジングの研究においては、精神が肉体に及ぼす影響やその逆の影響を考慮する必要があり、そして生体臨床医学的、社会的、さらには行動的な変化の不断の関わりについて認識しておかなければならない。

したがって、老年学者および老年医学者の責務と目標として、次の三つが挙げられる。

- ①生活の質を向上させること、
- ②男性と女性の平均余命を均一化すること(アメリカ合衆国においては、平均余命の相違は、現在約8年である)、
- ③より多くの人々がそれぞれ本来備わった寿命を全うするという、我々の望みの実現を目指して努力すること

我々はエイジングと栄養摂取、エイジングと薬理学、そして家庭のような社会的扶養制度などに関する研究はもちろんのこと、時の経過に伴う免疫、内分泌、中枢神経系統の変化に関する研究も、当然行わねばならない。

高齢に達することは、もはや今日では珍しいことではな

い。公衆衛生および免疫装置の改善によって、より多くの幼児、子ども、そして母親が以前よりも長生きをすることができるようになった。また、伝染病、心肺疾患、そしてガンの治療の進歩のおかげで、65歳以上の人々もさらに長い平均余命を期待することができるようになったが、そのために死とエイジングが連続しているかのような認識が生じていることも事実である。

しかし、エイジングが生涯のうちでも正常かつ自然な、しかも魅力的で興味深い時期であるということを再検討—まさに再評価—するために、より多くの時間をかけることが必要とされている。

■マスコミの偏見

私は、高齢者の絶対数と全人口に対する相対的な割合(高齢化率)が、異常な勢いで増加していることが、新たな偏見を生むことにならないよう切に望んでいる。私が危惧していることは、医療における緊急優先主義すなわち、戦場という特殊な状況のもとで生まれた緊急治療の必要に従って、患者の治療優先権を分類するといった方法が、高齢に達した人々からその努力の矛先をそらすことになり、結果的に彼らを冷遇することになりはしないかということである。

フランク・チャーチ上院議員が国際高齢者年の設立と高齢問題に関する国際会議を提唱したのも、高齢者が急激に増加したからにはほかならない。このような国際的活動は各国間の政治的な演出だけにとどめるのではなく、高齢者層に関して一般に広まっている様々な誤った社会通念を消散させるのに役立つことが、極めて重要なのである。若年層と高齢層との間の不和・対立の多くは、公共マス・メディアだけではなく、実際には政治家たちによって引き起こされるのである。

誤った社会通念の例を一つ挙げるとすれば、私は米国における家族の崩壊に関する神話をとり上げる。どういうわけか我々のマスコミは、多くの家族は高齢者を見捨てているという誤った見解をさかんに宣伝している。しかしながら、慎重に調査してみると、米国の施設に住んでいる高齢者の50%は身寄りのない人々である。そして、彼らの80%は

女性であり、これらの施設に入ることを許可される年齢の平均は80歳なのである。

彼らは見捨てられたのではなく、むしろ配偶者、兄弟姉妹、その他のもし生きていれば彼らの世話をしてくれていたであろう人々よりも、単に長生きをしたということに過ぎないのである。過去におけるいわゆる、「大家族」は、多産によって多くの兄弟姉妹、従兄弟、伯父・伯母などが集まっているのが特徴で、必ずしも世代数が多いということではなかった。3世代あるいはそれ以上の多数世代からなる家族が一般的となったのは、実は20世紀になってからなのである。

■ 家族の強化をこそ

そのような流れから高齢者のケアをする家族の役割に、より多くの注意を払うことにより、同時に財政的かつ社会的な援助の必要性がますます高まった。個人と社会の関係を整理しつつ、我々はその家族のための支援制度を構築し、家族内での不和を解消するための手助けをし、そして家族を持たない人々のためには親類縁者の代わりとなるものを提供する必要がある。私の理解している限りでは、日本では家族と社会との忠実な信頼関係という概念がよく知られているし、家族の告発ではなく、家族の強化こそが我々のできる最も重要な貢献の一つなのである。

これと同様に、社会も個人のための支援制度を定めるべきである。私は日本の新聞で、終身雇用制度および産業、社会・労働者間での極めて特殊な忠誠心についての記事を読んだことがある。与えられた社会環境のもとで、どちらが適切であるかを見極めるために、日本の制度と、アメリカ合衆国の社会保障を含む諸外国の制度とを比較することにより、我々の学ぶべきことがたくさんあると思う。

■ 二つの試練

最後に、生命の終焉に関連した問題をいくつか述べて終わりにしたいと思う。南禅寺勝平管長と同志社大学市川教授の発言を聞きながら、私は自分がどれくらい生きたいのかを自問していた。そして、私の答えは次の通りであろうと思う。

私は死ぬまでしか生きたくないということ、言い換えれば、正常な人間に特有の質的能力が、生活するうえで維持されている間だけ生きたいということである。しかし、死の恐ろしさを考えると、生活の質はどうか、生に対する欲望を捨てるということはなかなか困難である。このような問題をあれこれ考える際に、まさに宗教的時間という概念を理解することができる。宗教的時間は我々を解放した気持ちにさせるものである。生命は人間であろうと、動物であろうとあるいは植物でさえも永存するものであるという仮説は人に安らぎの気持ちをもたらす。

しかしお二方とも、地球について、そして地球の限られた資源については触れられなかったと思う。果たして地球にも寿命があるのだろうか。あるいは、我々は地球の永続性を勝手に推測しているのに過ぎないのだろうか。いまや、我々自身のためだけではなく、我々の子孫のためにも各国が協力して、地球とその資源を保護するための努力をすべき時期にきているのではないだろうか。そして、そうすることが我々の無私無欲を真の意味で試すことになるのではないだろうか。

我々の無私無欲を試すもう一つの試練は、我々が偏見なしに、また人々に安楽死を強制することなしに、命の延長の問題を扱うことができるかどうか、ということである。

終わりに、各国が直面する高齢化は、悲劇でも絶望の原因でもなく、まさに人類の偉大な功績に他ならないのだ、ということをご様に再認識していただきたいと思う。

これは人類の勝利であり、これから最大の努力を払うに値する問題なのである。